貿易論を学ぶ

小川雄平 編

●貿易の歴史と理論を学ぶ
●貿易取引の実際を学ぶ
●現代の世界貿易を学ぶ

WTO体制と世界貿易の新たな展開

経済のボーダーレス化やグローバル化に伴い、貿易の役割は飛躍的に拡大している。貿易の歴史と理論、貿易取引の仕組みを明らかにし、WTO成立後の世界貿易を展望する。

貿易論を学ぶ人のために

小川雄平 編

世界思想社

編者紹介

小川　雄平（おがわ・ゆうへい）

1944年　滋賀県に生まれる。
1974年　大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程修了。
現　職　西南学院大学商学部教授（中国吉林大学終身客員教授・丹東経済研究所名誉所長）。
著　書　『国際経済の新展開』世界思想社，1982年。
『アジア共生の時代』同友館，1991年。
『アジア経済の現代的構造』世界思想社，1994年。
『タイの工業化と社会の変容』九州大学出版会，1995年。
『環日本海経済・最前線』日本評論社，1995年。
など。

貿易論を学ぶ人のために

1997年 6 月15日　初版発行　　定価はカバーに表示しています

編　者　小川雄平（おがわ ゆうへい）

発行者　高島国男

世界思想社
京都市左京区岩倉南桑原町56　〒606
電話 075(721)6506(代)
振替 01000-6-2908

© 1997　Y. OGAWA　Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします
（共同印刷工業・藤沢製本）

ISBN4-7907-0654-0

はしがき

九五年一月、ＧＡＴＴに代わってＷＴＯ（世界貿易機関）が発足し、世界貿易は新たな局面を迎えることになった。ＷＴＯが、ＧＡＴＴウルグァイ・ラウンドの成果を統一的に実施する国際機関であり、財とサービスに関する新しい貿易ルールや知的所有権・貿易関連投資措置といった新たな通商ルールを管理するとともに、国際貿易紛争の調停の場としての重要な役割をも担っているからである。実際、ＷＴＯ発足による貿易自由化効果や各国の規制緩和＝市場開放効果もあって、九四年に四兆ドルの大台に乗せた世界貿易（名目輸出ベース）は、九五年には対前年比一九・五％と、八〇年以来一五年ぶりの大幅増を記録し、四兆九、九五四億ドルに達している。

こうした世界貿易の拡大を牽引しているのは、ＮＩＥＳ・ＡＳＥＡＮ・中国といった東アジアである。東アジアの世界貿易（輸出）に占めるシェアは、八五年の一〇・三％から九五年には一七・五％にまで高まっている。これに日本を加えると、シェアは二六・四％となり、世界貿易の四分の一以上が日本を含む東アジア地域によって担われていることになる。しかも、東アジア地域では域内貿易が急速な発展を見ているのである。

貿易はいうまでもなく、関係各国・各地域の国際分業関係を具体的に映し出す鏡である。とするなら、東アジアをめぐる貿易の発展、とりわけ域内貿易の急増は、東アジア域内における国際分業関係のどのような実態、あるいは変化を反映しているのであろうか。また、我々はその分業関係のなかでどのような役割を果たしうるのであろうか。というのは、日本にとって東アジアは不可欠の存在であるが、逆に東アジアにとっては日本の存在は必ずしも不可欠とはいえなくなってきているからである。貿易相手国としての日本の比重が低下しているだけではない。たとえば、中国は、日本ではなくＮＩＥＳを相手に地方主体の経済交流を活発化させ、局地的経済圏を形成しつつあるのである。

本書に類書にはない独創性があるとすれば、右のような問題を明らかにするために、テキストとしての体裁は保持しながら、東アジアの貿易の実態や日本をめぐる国際分業関係、新たな動きである地方主体の経済交流、さらには貿易を支える物流基盤についても多くの紙幅を費やしたことにあろう。読者の忌憚のない批判をお願いしたい。

最後に、本書の刊行を快く引き受けて下さった世界思想社編集部加藤明義氏に、執筆者を代表して心からお礼を申し上げたい。

一九九七年三月

編者　小川　雄平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

第一部　貿易の歴史と理論を学ぶ ―――― 1

第一章　貿易の発展と国際分業の成立 …… 小川　雄平　2

1　香料貿易と茶貿易（2）

2　砂糖植民地と奴隷貿易（9）

3　機械制大工業と国際分業（12）

〈コラム〉垂直分業・水平分業・産業内分業（21）

第二章　伝統的貿易理論とその応用 …… 李　善英　23

1　比較優位の理論（23）

2　ヘクシャー＝オリーン理論（31）

3　貿易と国民所得（39）
〈コラム〉円高とJカーブ効果（46）

第二部　貿易取引の実際を学ぶ ―― 49

第三章　貿易取引 …… 張　盛　50
1　売買契約の締結（50）
2　契約条項（51）
3　貿易取引条件（54）
4　取引の価格条件（57）
〈コラム〉個人輸入（61）

第四章　貿易決済 …… 張　盛　63
1　外国為替の仕組みと種類（63）
2　信用状取引（67）

3　外国為替相場（69）
〈コラム〉妥当な外国為替相場（75）

第三部　現代の世界貿易を学ぶ ―――― 77

第五章　貿易摩擦と市場開放 ……小川　雄平　78
1　GATTと貿易摩擦（78）
2　ウルグァイ・ラウンドと農産物・サービス貿易（84）
3　WTOと貿易新時代の課題（90）
〈コラム〉日本の経常収支黒字（98）

第六章　東アジア域内貿易の増大と新国際分業 ……河合　和男　100
1　東アジア地域の工業化（101）
2　東アジア域内貿易の進展（107）
3　日本の商品貿易構造の変化（112）

4　NIEsの商品貿易構造の変化（116）
5　ASEAN[4]・中国の商品貿易構造の変化（121）
6　日本・NIEsの直接投資と東アジア域内分業の新展開（127）
〈コラム〉企業内取引とタックス・ヘイブン（134）

第七章　国境貿易の発展と局地的経済圏の形成　……小川　雄平　136

1　中朝国境貿易の推移（137）
2　中朝国境貿易の停滞と食糧危機（143）
3　朝鮮の対外開放と東アジア地中海経済圏（149）
〈コラム〉図們江開発の可能性（156）

第八章　世界貿易の拡大を支える国際物流　……木幡　伸二　158

1　国際物流の変化の背景（158）
2　国際海上輸送の現状と国際物流（160）
3　国際航空輸送の現状と国際物流（167）
〈コラム〉日本の港湾・空港は生き残れるか（176）

終　章　南北問題と貿易の罠……小川雄平　178
1　垂直分業と貿易の罠（178）
2　水平分業と貿易の罠（182）
3　オールタナティブとしての公正貿易（188）
索　引
執筆者紹介

第一部　貿易の歴史と理論を学ぶ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　貿易の発展と国際分業の成立

1　香料貿易と茶貿易

豊かなアジアと貧しいヨーロッパ

二一世紀はアジアの世紀だといわれる。近年のＮＩＥＳ・ＡＳＥＡＮ・中国など東アジアの急速な工業化・高成長が、これら地域の巨大な潜在力のゆえに、引き続き持続・拡大すると考えられるからである。「アジア」が長らく貧困や停滞の代名詞であったことに思いをいたせば、アジアの著しい経済発展は新たな時代の始まりであると考えられても、何ら不思議ではない。

だが、正確には、〝アジアの時代の復活が始まった〟というべきである。というのは、かつてのアジアは、その豊かな物産と進んだ文化のゆえに、ヨーロッパ人の憧れの地であったからである。ヨーロッ

パの対アジア貿易は、香料（胡椒やスパイス類）・絹・陶磁器・綿製品・茶の調達に見られるように、ヨーロッパが一方的にアジアの物産を輸入する片貿易であり、したがってアジアの決済手段である「銀」を保有しなければアジア貿易にかかわることができなかったのである。

アジアの停滞が始まるのは、ヨーロッパの急速な資本主義発展以降のことである。それも、一八五〇年段階では、アジア極東地域の所得だけで世界全体の四〇％を占めたというから、アジアの停滞は一九世紀末から二〇世紀末までの高々一〇〇年間ということになる。ヨーロッパが産業革命を経て資本主義的発展を遂げるまで、豊かな先進地域がアジアであり、貧しい後進地域がヨーロッパであったことはもっと留意されてよい。

温帯と亜熱帯・熱帯に位置するアジアは豊富な農産物を有し、農耕生活を営んだのに対して、亜寒帯と温帯に位置するヨーロッパ、とりわけ北・中部ヨーロッパは農産物にも恵まれず、したがって貧しい牧畜生活を余儀なくされたことは周知の通りである。冬が長くて厳しい北・中部ヨーロッパの人々の食事は、塩漬け肉・塩乾魚と僅かばかりの野菜とであったというが、アジア産の香料は、こうした塩漬け肉や塩乾魚などの貯蔵食品には欠くことのできない調味料だったようである。事実、「地理上の発見」に先立つ一五世紀の国際商品は、絹や綿製品といった奢侈品と塩漬け肉・塩乾魚料理に不可欠の香料であって、ヨーロッパはアジアからの香料の輸入に努めた。いわゆる「香料貿易」である。しかし先述したように、対アジア貿易はヨーロッパが一方的に輸入する片貿易であって、ヨーロッパは対価として大量の銀をアジアに支払わざるをえなかったのである。したがって、アジアからの物産を購入し、財を築きうる者は、銀を保有する者に限られたのである。フッガー家に代表される南ドイツ産銀地域の巨商た

ちの興亡やスペイン・ポルトガル・オランダの盛衰が銀の獲得とその枯渇に起因していることからも、そのことは明瞭である。

新大陸からの銀流入と毛織物工業

一五世紀末以来の「地理上の発見」はアジアとヨーロッパとの間に航路を開き、アジアの物産を大量にヨーロッパに輸入することを可能にしたばかりでなく、新たに新大陸アメリカへの航路を就航させ、スペイン人による中南米からの金銀財宝の略奪や銀鉱山の開発をも可能にした。メキシコ・ペルーの銀山からは安価な銀が大量に産出され、スペイン人の手でヨーロッパに運び込まれた。この結果、ヨーロッパでは物価が二～三倍に高騰して、「価格革命」が引き起こされたといわれるが、膨大な銀のヨーロッパ流入は対アジア貿易の決済手段を大量に提供することにもなり、これまでアジア貿易に独占的に銀を提供してきた南ドイツの巨商たちの繁栄を終息させてしまった。

南ドイツの巨商たちに代わってアジア貿易に乗り出したのは、いち早く海上航路を開拓したポルトガル商人である。しかし、ポルトガル商人のアジア貿易は、ヨーロッパの唯一の工業品である毛織物によって、スペイン商人による新大陸貿易と結びつけられていた。というのは、毛織物をもってすれば新大陸からの安価な銀は容易に入手可能であり、こうして獲得された銀がアジアからの香料の輸入に使われたからである。

しかし、このことは、毛織物工業の発展した国が毛織物をもって新大陸の銀を獲得できることを意味する。とするなら、当時毛織物工業が最も発達していたオランダこそが新大陸からの銀を独占し、膨大

な銀を交換手段にアジア貿易を支配する可能性を有したことになる。事実、オランダは、ポルトガル商人を排斥して直接にアジア貿易に乗り出そうとする。すなわち、一五九六年にオランダ商船隊はジャワ島に到着し、一六〇二年にはアジア貿易の拠点となる「東インド会社」を設立した。その後のアジア進出はめざましく、後述するように、一七世紀中頃までにアジア貿易の支配権を手中に収めるに至る。まず、オランダは毛織物と交換に入手したスペインのピアストル銀貨（メキシコ・ペルーで鋳造された純度の高い銀貨）を交換手段に、アジアの物産とくにスパイスのヨーロッパへの販売活動を通じて、その繁栄の基礎を築いたのである。

オランダの繁栄を支えた日本の銀

ところで、ポルトガル・オランダがアジアとの交易を拡大しようとすれば、スペインのピアストル銀貨だけでは足りなかった。香料以外に絹・綿製品・陶磁器さらには茶がヨーロッパにとって魅力的な商品だということになれば、アジアとの貿易決済に必要な銀は増大の一途をたどるからである。こうして、新たな銀の供給源が求められることとなった。新たに銀を供給することになったのは、当時の世界有数の産銀国であった日本である。日本からの銀の流出は、江戸幕府がオランダ船への銀輸出を禁止する一六六八年まで続いたが、一七世紀初頭以来年間二〇万キログラムに及んだという。年間二〇万キログラムという数字は、最盛期に新大陸からヨーロッパに流入した銀の量に匹敵するといわれるくらいに膨大なものであった[1]。

それでは、日本から大量の銀を調達したオランダは、交換に日本に何を持ち込んだのであろうか。日

本に持ち込んだものとしては、葡萄酒・印刷品・ガラス製品などが知られている。しかし、それにも増して重要なのは、中国産の生糸・絹織物・綿織物、東南アジアからの砂糖・香料である。すなわち、日本と中国（明）の間で公式な貿易が認められなかった結果、日本の対外貿易はポルトガル船・オランダ船などとともに幕府から朱印状を得た大名・商人（在日華商・ヨーロッパ商人を含む）の手によって行われていた（朱印船貿易）。この朱印船も海禁政策をとる中国本土には入港できなかったので、中国船の入港するマニラ、トンキン（ベトナム）、台湾等の港に出かけて中国産の生糸・絹織物や東南アジアからの砂糖等を日本に運んでいた。ところが、徳川幕府の鎖国政策の一環として日本人の海外渡航禁止令（一六三五年）が出されて朱印船貿易が終わり、ポルトガル船の来航も禁止される（一六三九年）と、オランダ商人が日本の対外貿易と日本の銀を掌握するのである。

こうして、オランダ商人は日本の対外貿易を仲介することで、日本から大量の銀を持ち出したのである。ここで興味深いのは、中国産の生糸・絹織物や東南アジアからの砂糖・香料に加えて金が日本に持ち込まれ、銀と交換されていることである。これは、日本で銀山が開発され、銀が増産された結果、一六世紀後半に金・銀比価（金と銀の交換比率）が一対一〇にまで銀安になったためである。[2] 中国・東南アジアと日本とで金銀比価が異なっておれば、つまり金の価値が中国・東南アジアに比べて日本の方が高ければ、金は日本に持ち込まれて銀と交換されることになる。そうだとすれば、オランダは、中国や東南アジアから日本に金を持ち込んで銀を調達し、この銀と交換に獲得したアジアの物産をヨーロッパに持ち帰るという商業活動によって繁栄したということになろう。

表**1-1**はオランダ船に支払われた金・銀の推移を示している。これによれば、銀輸出禁止令が出さ

れるまでは、オランダ商人への支払いは銀が中心であったが、禁止令以降は金に切り替わっている。さらに興味深いのは、金の支払いが一六八〇年代以降激減していることである。支払いの激減は、いうまでもなく輸入の激減を意味している。では、どうして輸入が激減したのであろうか。「輸入代替」の進行である。すなわち、輸入の太宗を占めた生糸・絹織物・綿織物・砂糖の国内生産が図られるようになったのである。鎖国政策が輸入代替化を促進したと考えてよい。中国からの技術移転がこれら輸入品の国内生産に大きな役割を果たしたものと思われる。加えて、国内生産を可能にした自然条件も忘れられてはならない。というのは、後で見るように、イギリスが自然条件の制約によってアジアからの輸入品を国内では輸入代替できず、結局は周辺国を自国本位の国際分業関係に編成してしまうことになるからである。

表1-1　日本からオランダへの金銀輸出

（単位：フローリン）

期　間	銀	金
1640-49	15,188,713	——
50-59	13,151,211	——
60-69	10,488,214	4,060,916
70-79	——	11,541,481
80-89	——	2,983,830
90-99	——	2,289,520

原資料）Glamann, K., *Dutch-Asiatic Trade 1620-1740*, Copenhagen & The Hague, 1958.

出所）宮崎・奥村・森田編『近代国際経済要覧』東京大学出版会，1981年。

新商品「茶」の登場

オランダ商人による日本との取引は、右に見たように「銀」の調達が目的であったが、他方で「茶」をヨーロッパに紹介し、国際商品化するきっかけともなった。オランダ商人が最初に茶に接したのは、取引相手である日本の商人に接待された際に振る舞われた抹茶であろうと思われる。いわゆる「茶の湯」で、その鮮やかな緑色もさることながら、儀式めいた飲み方に、憧れの東洋文化の凝縮を見たのであろう。東洋文化を体現した飲み物として、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com